

【第1回大会】



日本VR学会第1回大会

大会を終えて

廣瀬通孝

大会長
(東京大学)

第1回VR学会大会が10月8、9日の両日にわたって開催され、盛況のうちにその幕を閉じた。初日は小雨模様であり、参加者の出足が心配されたが、10時開始時点では約250名が国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議場に集まり、立花隆氏の特別講演の開始を待った。最終的な参加人数は全部で380名に達し、第一回目としては、ますますのスタートを切ったと言えるのではないだろうか。

本大会は、いろいろな意味においてユニークだったという意見を各所で耳にする。論文発表では、専門技術的な話題が論理的に展開する一方で、芸術展示があり、アーティストが参加者の感性に訴える。そしてさらに製品展示が現実的システムのデモンストレーションを行ない、VR産業のテイクオフを感じさせる。これらはお互いに、それぞれの個性を主張しつつ、しかしVRという軸のもとで巧妙に融合していたと思う。小生も何か新しい学会のスタイルを見たような気がする。これが手前味噌でないことは、先述の通りであり、参加者の皆様も賛成してくれるものと思う。

実行委員の平均年齢が若かったことも特徴的なことと思う。比較的経験の少ない委員の皆様が、しかし一生懸命に手づくりの大会運営をしてくれたと思う。大会終了後の実行委員会での委員諸兄の笑顔は最高であった。委員長として、ずいぶん無理なお願いもしたことと記憶しているが、だれもがいやな顔ひとつせずご協力いただいた。心からありがとうを申し上げたい。

特記すべきことは、各界からの心あたたまご支援の数々である。大会のポスター、大会論文集、懇親会など

申し訳ないほどの予算で実現することができた。特に展示にあたっての産業界からの金銭的援助は、大会運営に大きな安定感を与えてくれた。会場のオリンピック記念青少年総合センターも、国立施設としては考えられないほどの便宜を図っていただいた。関係各位に改めてお礼を申し上げます。

そして何といたってもこの大会を成功にみちびいたのは、会員諸氏のご支援である。今後とも学会全体が、この熱意を持ち続けることができればと期待する。ともあれ、皆様、本当にお疲れ様でした。

(News Letter No. 6より転載)

大会後記

小木哲朗

総務担当
(東京大学)

日本バーチャルリアリティ学会第1回大会の幹事および事務局を努めさせて頂きました。慣れない仕事のため不手際も多く、たくさんの方々に御迷惑をおかけしましたが、無事に大会を終えることができてほっとしているところです。今回何といたっても一番の心配事だったのは、第1回目の大会ということでどれだけの人が参加してくれるか全く見当がつかなかったことです。そのため、実行委員を始めとしていろいろな方々の人脈をお借りして広報活動を行ったわけですが、1000枚作成したポスターが各大学や企業の掲示板に貼られるまでには、非常にたくさんの方々の手を経由したと思います。

その成果もあり、大会の1週間前ともなると問合せ等が急増してきて、私の部屋では電話とFAX、おまけに電子メール受信のピープ音が同時に鳴っているなどという状況が頻繁になり、悲鳴を上げると同時に大会への関心が集まってきたことに安心したりもしました。結局、ふたを

開けてみると主催者発表 369人という参加者を集めることができ、第1回目の大会としては、成功だったのではないかと考えています。

最後になりましたが、無事に大会を終えることができたのは、準備に携わった実行委員の先生方の努力もさることながら、当日の受付や会場係を手伝って頂いた学生諸氏の協力によるところが大きかったと思います。この場を借りてお礼を申し上げます。

(News Letter No. 6より転載)

技術展示を振り返って

伊藤 一男

技術展示担当

(旭エレクトロニクス(株)VR部)

10月9日、記念すべき日本VR学会の第一回大会が、盛況の内に無事終了した。大会委員長の廣瀬先生をはじめ、多くの関係者の努力の結晶の賜であり、技術展示委員の一人であった私にとって、大会終了後のビールは格別においしかった。皆初めての体験であったこの大会を、実行委員、技術展示担当として振り返ってみたい。

当初の企画段階では、『やはりVRだから多くの人に体験してもらうのが一番』と展示することにすんなり決まったが、どのようなVRを出すのが良いのか、どこが出演してくれるのか、果たして展示の予算はいくらかかるのかなど、課題は山積で前途多難であった。出展は、学術展示8件、アート展示3件、企業展示10件、合計21展示となり、なかなか見応えのある展示になったと思う。特に、学術展示とアート展示は、日頃研究室でしか見ることのできない研究を多くの人たちに見て体験してもらったことは、今後のVRの普及促進に大いに貢献したと思う。また、展示内容の面でも、3Dディスプレイ、3D操作デバイス、3D音響の展示、医療、地震体験アプリケーションの展示等、VRならではのバラエティに富んだ展示が揃ったように思う。来年は、さらにいろいろな分野からの展示が増えることを期待するが、会場での展示と同時にInternetを利用してリアルタイムに全国の研究室を紹介したらどうだろうか？できれば、VRML等を使ってインタラクティブな体験ができればベストと思うが……。

VR学会が他の学会と違うところは、その応用分野の広さもさることながら、研究成果を、体験を通じ表現し、ディスカッションができることではないかと思う。その意味では、来年の名古屋での第二回大会にも多くの研究者

が展示を希望するような環境を整えることが必要ではないかと思う。

最後に、VRに携わっている企業の一員として、この歴史的な第一回大会の運営に少しでも関わることができたことを喜びとし、来年以降も、できる限りの支援をしたいと思っている。

(News Letter No. 6より転載)

第1回日本バーチャルリアリティ大会を終えて

石井 抱

会計担当

(東京大学)

今回、第一回日本バーチャルリアリティ学会大会の実行委員の機会を頂きまして、近年稀に見るスマートな学術講演会の実現に微力ながらお手伝いできたことを大変嬉しく思っております。

非常に環境の整った代々木オリンピックセンターにおいて開かれた第一回大会ですが、最先端のしかも多方面の研究の講演を聞き、実際に見て触れるという実体験を同時に共有できる空間を数多くの人々に味わって頂ければという大会当初の目標を十分に達成できたのではないかと考えております。第一回の大会ということもあり、大会前日は、どのくらいの数の方々に参加して頂けるかと思っておりましたが、予想をはるかに越える数の方々に参加して頂いたことに、大会運営に携わるものとして感激しております。

私個人としては、数多くの素晴らしい講演や展示もさることながら、夜の懇親会におけるガムランの生の響きが非常に印象的であり、人間の五感に響きわたるあの音色が忘れられないものがありました。学会の大会の懇親会でこのような体験ができるとは思っておりませんでしたので、意外であったとともにとても衝撃的でした。

このような大会が来年以降も開催されると思うと、今からとても待ち遠しく思っております。今年の大会では、実行委員という立場上、全ての講演を聞くことができる時間はありませんでしたが、来年の大会では、参加者として大会を満喫できればと思っております。

最後に、この第一回日本バーチャルリアリティ学会大会を成功に導いて頂きました、廣瀬先生を始めとする他の大会実行委員の方々、日本バーチャルリアリティ学会